

大学生の恋愛観と 実写ドラマ・映画の視聴との関連

坂東玲季 安藤美華代
(岡山大学大学院社会文化科学研究科)

本研究では、大学生の恋愛観と実写のドラマ・映画の恋愛観との差異について、視聴頻度や実写のドラマ・映画を参考にする程度との関連を検討した。これまでのメディアと個人の価値観に関する研究では、テレビの視聴時間が長い人、雑誌を定期購読している人が、ボディイメージについて、特に大きな影響を受けていることが示された(浦上・小島・沢宮, 2015)。本研究では、個人の価値観として恋愛観を、メディアとして実写のドラマ・映画を取り上げ、大学生の恋愛観とメディアの関連を検討する。

方法

対象と手続き 大学生を対象に質問紙調査を行い、有効回答が得られた401名(男性171名, 女性230名, 平均年齢19.0歳, $SD=1.02$)を分析対象とした。回答は、無記名で、研究以外の目的で使用しないこと、回答者が不利益を被ることがないことを質問紙票に明記し、口頭でも説明を行った。提出をもって協力への同意とみなした。

調査内容 (1)学年, 年齢, 性別について尋ねた。

(2)実写のドラマ・映画の視聴頻度について、「ほとんど毎日見る」から「全く見ない」の7件法で回答を求めた。

(3)恋愛において実写のドラマ・映画を意識する程度を6項目尋ね、「非常によく当てはまる」から「全く当てはまらない」の7件法で回答を求めた。因子分析の結果1因子で構成されたことから、単純加算し項目数で除した値を「ドラマ・映画の意識度」得点とした。

(4)7つの下位尺度から成る「恋愛イメージ尺度」(28項目)(金政, 2002)を使用した。回答者自身の恋愛観について、最も感銘を受けた実写のドラマ・映画の登場人物の恋愛観について、それぞれ同じ内容を尋ね、「非常によく当てはまる」から「全く当てはまらない」の7件法で回答を求めた。そして、実写のドラマ・映画の恋愛観の尺度得点から、回答者自身の恋愛観の尺度得点を減算し、得られた値の絶対値を差異得点とした。

結果と考察

実写のドラマ・映画の視聴頻度、意識する程度を独立変数、自身と実写のドラマ・映画の恋愛観との差の夫々の下位因子を従属変数として、強制投入法による重回帰分析を行った。統計的有意水準は、0.05とした。分析結果のまとめを図1に示した。ドラマ・映画をよく視聴する人程、恋愛とは相手に献身するものだというイメージについて、ドラマ・映画と自身の恋愛観の間のずれが大きかった。その他の恋愛観の下位尺度については、視聴頻度との関連が見られなかった。これは、テレビの視聴時間が長い人が、特に大きな影響を受けるとした先行研究の結果(浦上ら, 2015)とは矛盾した。

恋愛において実写ドラマ・映画を意識する人程、恋愛は必要なものだ、相互に思いやるものだ、相手を独占したくなるものだ、相手に献身するものだ、成長につながるものだというイメージについて、ドラマ・映画と自身の恋愛観のずれが小さかった。ドラマ・映画を意識する程度が高い人は、ドラマ・映画の内容を現実の自身の恋愛に反映させやすい傾向がある可能性が考えられる。

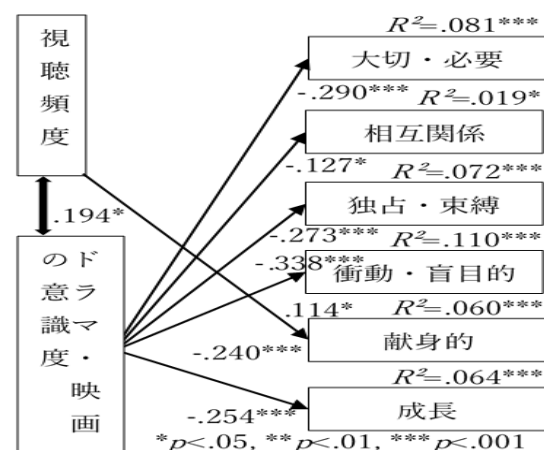


図1 実写のドラマ・映画の視聴頻度、参考にする程度、自身と実写のドラマ・映画の恋愛観の差の重回帰分析のまとめ

引用文献

金政祐司(2002) 恋愛イメージ尺度の作成とその検証—親密な異性関係, 成人の愛スタイルとの関連から—対人社会心理学研究, 2, 93-101